
剣製の吸血姫～ネギま！訪問録～

一般兵 高天原 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣製の吸血姫〜ネギま！訪問録〜

【Nコード】

N 8 7 6 1 K

【作者名】

一般兵 高天原 A

【あらすじ】

異世界の地で無限の剣製を待ち受けるモノは…。

無期限で感想の受付を停止させました。

零話／序章

「はあはあはあ。」

膝を突いた状態で浅く呼吸を繰り返している一人の男がいた。

彼の名前はエミヤシロウ。錬鉄の魔術師と呼ばれる封印指定の魔術師である。

そんな彼は今、全身から血を流し今にも倒れそうな状態でいた。

「ウフフ。もう終わりかしら？ もっと私を楽しませてくれると思ったのだけど？」

跪くシロウを楽しそうに嗤いながら眺める一人の女。その手からは真っ赤な血が滴り落ちている。

「ご期待に添えなくて申し訳ないが此方には君を楽しませる義理は無い。悪く思わないでくれ。」

不適に笑い女を見上げるシロウ。ワザと相手を挑発するかのような皮肉を言い余裕な態度をみせようとするシロウ。しかしシロウの顔

は真っ青になっており血の気を失っており一目でハッターだとわかってしまう。

「あらあら、まだまだ余裕みたいね。　ならもう少し私と踊ってもらおうかしら？」

「やれやれ。此方の都合は関係無しか。　正直遠慮願いたいのだが、避けては通れないのだろ…？」

シロウの脳裏に有るのは自分の真後ろにある小さな街。

シロウは痛む身体を無理やり立たせ、今にも途切れそうな意識を奮い立たせ目の前の敵を見据える。

その手には白と黒の二対の夫婦剣。そしてダラリと腕を降ろし自然体の構えをとる。

一見隙のありそうなこの構えだが、その実何処にも隙などは見えず構えている。そして、その鷹の眼のような双眸は目の前の敵を油断など微塵もなく見ている。

「さあ…踊りましょう。　貴方と私、どちらかが死ぬまでとまらない死の円舞を！！」

先に動いたのは女。シロウはその行動を静かに眺め迎え撃つ。

「――行くぞ吸血鬼。浄化の覚悟は充分か？」

一話／遭遇（１）

「うつ…！…此処は、いつたい？」

目が覚めると私は見知らぬ場所にいた。

身を起こし、周囲を見渡すと、辺り一面が木々で覆われている。

それが森の中だと気づくのにそう時間もかからなかった。

私は今、自分の置かれている状況にとっても困惑していた。取りあえず私は、自分の心を落ち着かせて今の状況を考えることにした。

先ず今自分がいるこの場所。全く見覚えの無いこの場所はいったい何処なのだろうか。

今分かるのは、ここがかなり深い森の中だと言うこと。

次に私は自分の状態を確認し始めた。

今自分が纏っている物は少し大きめの外套一枚しかない。それに自分の足下には大量の血痕がある。

次に自分の身体を確認してみる。

外傷どころか染み一つ無い真っ白な肌が現れる。しかしその身体には、自らの身体から流れ出たであろうと思われる血液が付着してい

た。

付着した血液や地面の血痕の量から見ると、致死量に近い量の血液が流れたことになるだろう。

（どう言うことだ？ これだけの出血のあとが有るのに、私の身体には傷一つ見当たらないなんて？）

そして一番の疑問は、自分が誰なのか全く分からない事だった。

名前はおろか、自分の住んでいた場所や血液型すら分からない始末。しかし不思議と不安などはなかった。

「取りあえずこの場所から動くか。いつまでも此処にいても埒が明かない。」

そう決意すると、私はこの場所を移動するために腰を上げた。

ふと何気なく私は空を見上げた。そこには見事なまでの美しい満月が怪しくも優しげな光を放っていた。

「良い月夜だな…。」

「ああ全く、殺し合うには良い月夜だよ。」

突如かけられたら言葉に驚き私は声のした方向へと顔を向けた。

そこには、ボロボロのマントを纏い宙に浮いている一人の少女がいた。

「なっ!？」

「何を惚けている。フン。何の目的かは知らんが、この地に足を踏み入れるとは馬鹿な奴だ。」

そう不機嫌そうに言い放ち眼を細め不適に笑う少女。

「クツクツク。まあ私に出会ったのが運の尽きさ。さあ侵入者、少しは私を楽しませてみる!！」

そう言い放ち懷から小さなフラスコを取り出す少女。

これが最強の魔法使いである闇の福音との最初の出会いであった。

二話／遭遇（２）

私が空に浮かぶ少女に目を奪われ佇んでいると、何かが自分に向かってくるのを感じ、私は咄嗟にその場所から飛び退いた。

すると、数秒前まで自分がいたその場所に何かが飛来し、大きな音と共に地面に激突をした。

私は咄嗟に顔を腕で庇い激突した物体を確認する為に立ち上がる砂煙を見た。

「なっ!？」

立ち上がる砂煙の中から現れたのは、抉れた地面に突き刺さる細いワイヤーに繋がった腕だった。

私は驚きその腕を凝視していた。すると空に浮かぶ少女が意外そうに、それでいて楽しそうな声で話しかけてきた。

「ほお…。今のを避けるか？ コレは中々存外に楽しめるかも知れんな。」

ニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべ少女は私を見下ろした。

「茶々丸！ 小細工は無しだ。 久々に楽しめそうな相手だ、存分に持て成してやれ！！」

少女の声と共に地面に刺さっていた腕が微かな駆動音と共に、樹の生い茂る暗い森の中へと吸い込まれていく。

数秒とかからずに消えた腕の行き先を静かに見つめていると、その森の中からメイド服を纏った緑色の髪をした少女が現れた。

少女は立ち止まり両手を前で重ねるとぺこりと頭を下げた。

「初めまして。 マスターの命令により、暫しばかり私と、ダンスのお付き合いをして頂きます。」

絡繰茶々丸と名乗った少女はそう告げるとメイド服のスカートの両裾を少し摘み再度お辞儀をした。

「全く、君のような少女に誘われたら断れなど出来まい。」

私は空に浮かぶ少女を気にしながら、目の前の少女に視線を向けた。

自分の事に関する記憶は全くもって思い出せないが、頭に浮かぶ一節の言葉だけは覚えている。そして私がどんな存在であったかも。

故に私は私人生の中で最も言い慣れているであろう言葉を放った。

「投影・開始」
トレース・オン

紡がれた呪文は形となり私の両手に現れた。白と黒の二対の中華剣を自然体に構え、私は油断無く茶々丸を見据える。

二人の顔が驚きに染まった。目の前の人物が一言言葉を呟いた途端、虚空から二振りの双剣が出現し、その手の中に収まったのだった。

「無詠唱による転送魔法か。面白い芸を持つてるじゃないか。」
アポーツ

先程の驚いた表情は既に無く、その顔は獲物を見つめる狩人のそれ。

そして狩る側の少女は己の従者である、眼下の少女へと命令を発した。

「茶々丸！ 手加減は一切無しだ。 全力で叩き潰せ！！」

「イエス。 マイマスター。 それでは一曲、お相手願います。」

茶々丸はそう告げると自らの手を抜き手のように形作ると構えをとった。

「やれやれ。 エスコートも大変だ。 だが君みたいな美しい女性では、私は些か役不足であろう。 早々に切り上げさせてもらう。」

そう言い双剣を構える。 お互いの間に緊張が走る。

開始を告げる一陣の風が吹いた。
今此処に戦いの火蓋がきつて落とされた。

三話／遭遇（3）

それはまさに嵐のような攻防戦であった。

片や素手による打撃や刺突による攻撃。片や二対の双剣による連続攻撃。

茶々丸の繰り出す突きを侵入者は器用に剣の腹で弾き、全ての攻撃をいなして行く。

生半可な技量では出来ない芸当を侵入者は平然とやってのけている。侵入者の実力は相当のモノであると思われる。

しかし、その攻防戦も一時の終わりを見せた。バキンと大きな音と共にお互いに大きく跳躍し距離をとった。

これだけの攻防戦の中、茶々丸は言わずもがな侵入者の方も息一つ乱すところか、一滴の汗さえも掻いてはいない。

「まさかコレほどの腕前とは驚きました。マスターが喜ばれる筈です。しかしこの戦いは…。」

茶々丸はそう言うと、侵入者の持つ白い剣を視線だけ動かし見た。

侵入者の持つ白い剣は刀身の半ばから折れていた。侵入者は自らが持つ折れた白い剣を確認する。すると折れた剣は溶けるように空気中に霧散していった。

そして茶々丸も。

「引き分けの样ですね。」

自らの右手に視線を送るとその指はあらぬ方向へとねじ曲がり、ボロボロになっていた。

侵入者も茶々丸の手の状態を確認する。普通の人間でなら眼を背けなくなる光景ではあるが侵入者は平然とその光景をみている。

侵入者は茶々丸の言った言葉に対して口の端を歪め笑った。

「いや…。私の勝ちさ。」

その言葉と同時に空手になった右腕を振り上げ小さなナイフ・ダークを茶々丸目掛けて投げた。

「!!」

虚を突かれ一瞬動きが止まる茶々丸。だが、即座に反応しそのナイフを打ち払う。

「くっ!？」

しかしその一瞬の隙を侵入者は見逃さなかった。

素早く茶々丸の元へと近づくと、いつの間にか右手に出現していた先程碎けて消えた物と同じ白い剣と黒い剣を交差する様に茶々丸に斬りかかった。

だが然し茶々丸も状態をずらし、左右の乳房に切っ先を掠らせながらもその攻撃を避けて魅せた。

その勢いで侵入者へと蹴りを放ちながら後方へと跳んだ。

しかし不安定な体制から放った蹴りは案の定避けられ侵入者の方も同じ様に跳んで距離をとった。

地面を滑るように着地をした茶々丸と侵入者。斬られた茶々丸のメイド服は胸元がはだけているが今はそれを気にする様な余裕は無い。

「驚いたな。　今ので勝ったと思ったのだが。」

素直に驚いている侵入者。　本当に先程の攻撃で終わらせるつもりだったのであろう。

「しかも離れ際に一撃放つとは、全く末恐ろしいよ君は……。」

去り際の一撃を賞賛し笑みを浮かべる。

「お褒めに与り光栄です。　アナタも先程の奇襲お見事でした。」

茶々丸も賞賛を述べると同時に仄かに微笑む。

激しい攻防戦の中で二人にしか解らない、ある種の会話のようなものでお互いにお互いの事を通じ合ったようなそんな感じに見えた。

「だけど悪いね。　やっぱり私の勝ちだ。」

侵入者の言葉と同時に茶々丸の立っている周りに無数の長剣が降り注いだ。さながら其れは闇夜を切り裂く流星の如く地面に突き刺さる。

「コレはッ!？」

何の変哲も無い只の剣に見えるがその一本一本から感じる魔力は、それらの剣を妖刀、魔剣と言っても差し支えないであろう。

侵入者はダークを投げた時に既に茶々丸が避けて着地する場所を計算し上空に剣を待機させていたのだ。

流石の茶々丸もコレには驚き対処が遅れてしまった。

そして侵入者は止めの言葉と一節の詠唱を唱えた。

「フローキン・ファンタズム
壊れた幻想」

その言葉と同時に剣に内包されていた魔力が膨れ上がり解放された。

広がる閃光。襲い掛かる爆風。茶々丸はその中へと飲み込まれていた。

四話／遭遇（４）

上空より突如飛来した無数の刀剣。それが私の周りを取り囲むように突き立った。

その一本一本から魔力の反応を感知します。そのどれもが最上級の魔法武器に相当するでしょう。

しかし剣群は私の周りに突き刺さっただけ。どのような方法でこれらの刀剣類を上空に出現させたのかは解りませんが、その総ては私に当たることなく今も地面に突き立っているだけ。

私は相手が失敗したものと考えこの機を逃すまいと迎撃の体制に移ろうとしたその時、突如先程の刀剣に内包されていた魔力が膨れ上がるのを感じた。

爆ぜる魔力。

広がる閃光。

それら総てが私を飲み込もうとした。

爆ぜた魔力の一つ一つが上級魔法並の威力と推測されます。

駄目です。全方位から私を囲む剣。今の私には逃げ場がありません。あと一秒速ければ避けられたかも知れませんが…。

思い浮かぶのは最強にして最高の魔法使いであり我が主であるマスター！。

そして何時も路地裏でエサを上げていたネコ達。私が居なくなるとエサを上げられる者が居なくなってしまうです。

「すみませんマスター。私が居なくなったらあの子達にエサを…。

」

そうして私は光に呑み込まれた。

五話／遭遇（5）（前書き）

お久しぶりです。

文章とも呼べない文字の羅列ですが楽しんで頂けたら幸いです。

五話 / 遭遇 (5)

ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想が決まり目の前の少女がその凄まじい爆発に飲み込まれたのを確認した。

爆音と共に発せられた閃光が辺りを覆い私の視界を眩く照らす。

ブローケン・ファンタズム
複数の壊れた幻想を一度に受けて先程の少女は一溜まりも無いだろう。私はそれでも油断無く未だに燃えている少女の居場所を見つめている。

そして燃え盛る炎の勢いが弱くなりそれは見えた。

ゆらゆらと揺らめく炎の中に佇む二つの人影。それを護るように分厚い氷の壁が聳え立っている。

一人は先程まで私と死闘を演じていた緑色の髪の少女。そしてもう一つ影は…。

「今のは流石にヤバかったな。 フフツ。 茶々丸を追い詰め、あまつさ 剰えこの私に手を出さすとは、些か貴様の事を侮っていた様だ。」

金色に輝く絹の様に美しい髪を、常人では先ず耐えられないであろう熱風の中ではためかせ左手を前に突き出す格好で悠然と佇んでいる黒衣の少女。

「申し訳ありませんマスター。マスターの御命令を完遂出来ないまでか、マスターの手を煩わせてしまいました。この処罰は如何様にも……。」

「ふん。コレは相手を見くびっていた私の落ち度だ。罰すると言うのであれば、それは私自身であろう。だから、お前はその様な下らん事を考えるな。」

少女は後ろを振り向くことなく茶々丸を叱責する。茶々丸は今度こそ主の期待に応えるべく目の前の敵に目をやった。

「さて待たせたな。正直貴様の事を侮っていたよ。貴様が此処までやれるとはな。貴様を侮っていた事を詫びよう。」

少女は目の前の侵入者を賞賛しそして静かに謝罪の言葉を述べた。

侵入者の少女は目の前の少女から賞賛を受けたことに内心驚きながらも、その事を表には出さずあくまで冷静な表情で目の前の少女に視線を送った。

「キミのような美しい女性に、その様に言っただけで貰えるとは嬉しい限りだ。」

少女に謝辞を述べ軽く微笑む。

「フン。だが、ソレとコレとは話は別だ。私の従者を傷付けた代償は払って貰う。貴様の命でな。」

少女は全身から殺気を放ち、眼前の敵を屠るべくその手に魔力を練り上げてゆく。

「さあ第二回戦の幕開けだ。簡単には死んでくれるなよ？」

ゾクリと周りの空気が重くなるのを感じた。濃厚な殺気が肌を突きチリチリと痛みを感じる。

「我が名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル貴様を屠る者の名だ覚えておけ。」

少女の名乗りに此方も対応の対応をしなければならない。しかし自分には名乗るべき名前がない。

その時ふと一つの名前が頭に浮かんだ。不思議とその名前がしっくりとし、自然と口からこぼれた。

「私の名はエミヤ…。エミヤ…シロウ。生憎だがこの命、そう簡単にくれてやる積もりは毛頭無いのでね、少しは抵抗させて貰おう。」

躊躇いながらも名前を告げた少女エミヤ。

両者の間に走る緊張感が増し、辺り一面の空間を支配してゆく。

「リク・ラクラ・ラック・ライラック！！氷の精霊17頭。集い来たりて敵を切り裂け。『魔法の射手・連弾・氷の17矢』《セプテンデキム・スピリトゥス・グラキアーレス・コエウンテース・インミクム・コンキダント　サギタ・マギカ・セリエス・グラキアーリス》！！」

「投影・開始！《トレース・オン》」

お互いに、眼前の敵を打ち倒すべく詠唱をした。

こうして戦いの第二幕は役者を変え、新たなる戦いの火蓋が切って落とされた。

六話／遭遇（6）（前書き）

お久しぶりです。

またまた文章の羅列ですが雰囲気を楽しんでいただけたら嬉しいです。

六話／遭遇（6）

無数に迫る氷の矢を隙間を縫うように避けエヴァンジェリンに迫る。その手には使い慣れた二対の夫婦剣が握られている。

シロウは全ての矢をかくぐり、眼前に残り数メートルにまでエヴァンジェリンを捉える。そして両脚に力を込め残りの数メートルを一気にエヴァンジェリンの正面まで躍り出た。

そして目の前の敵を打ち倒すべく、身体を弓の様に反らせ、渾身の力を込めと両手に握った夫婦剣を振り下ろした。

しかしその一撃は小さな氷の楯に阻まれエヴァンジェリンに届くことはなかった。

「『氷楯』《レフレクシオー》」

剣は弾かれ無残にも空を舞った。

「チツ！対物理障壁か。」

舌打ちと共にエヴァンジェリンから離れ再び距離をとったエミヤ。

「次は此方から行かせてもらおう。」

エヴァンジェリンはそう言うのと右手を上げ魔力を練り上げる。
その途端周囲の温度が急激に下がり冷え始めた。

「氷神の戦鎚」
マレウス・アクイローニス

エヴァンジェリンの掲げた右手の掌に巨大な氷塊が現れた。

「さあ避^よけて見せろ。」

そして、エヴァンジェリンは薄く笑い、無情にもその右手を振り下ろした。

巨大な氷の塊がエミヤ目掛けて振り落とされる。

「くっ!？」

頭上に迫る氷塊をどうにか避^よけ、横に跳んだ。

「ふふ。今のを避けたか。　しかしまだ終わりではないぞ。　それから次だ！」

そう言うとエヴァンジェリンは再び呪文の詠唱を始めた。

「リク・ラクラ・ラック・ライラック！！　闇の精霊29柱…『魔法の射手・連弾・闇の29矢』《ウンデトリীগンタ・スピリトウス・オブスクーリ…サギタ・マギカ・セリエス・オブスクーリ》！！」

放たれた黒い弾丸がエミヤにへと迫る。

氷塊を避けたかばかりで態勢が整っていないエミヤには黒い弾丸を避ける手立てがあらず、闇の弾丸はその全てがエミヤの体へと吸い込まれるように着弾した。

土埃が立ち込みエミヤの姿が見えない。

そんな中エヴァンジェリンはエミヤの居た場所に喋り掛ける。

「まさか、これで幕引きと言う訳ではあるまい…？　その身に溢れし魔の力、この私に魅せてみせる！」

エヴァンジェリンが言い切ったまさにその瞬間、土埃の中から人影が浮かび上がった。

それは魔弾による攻撃を全て受け、全身から血を流しながらも己の脚でしっかりと立ち、左手に弓を構えたエミヤであった。

ギリギリまで引き絞られた弦とつがえられた強大な魔力を放つ矢、そして鷹のような鋭い瞳がその一撃が必殺の一矢であるとエヴァンジェリンに教えていた。

「望み通りこれが私の力だ。何、つりは要らん存分に味わうと良い。」

そう言うときエミヤは右手を離し、矢をエヴァンジェリン目掛けて放った。

その矢の形状はどこか変わっていた。

その形は矢と言うよりは寧ろ剣の形に近い物だった。

矢は迷うことなく一直線に、予め決まっていたかのようにエヴァンジェリン目掛けて飛んでいく。

「くつくつく。やはりな！ この程度でやれる等とは思っては居なかったが、なかなかの反撃だ！」

エヴァンジェリンは満足そうに言う。対物・魔法障壁を自分の前方に展開する。

矢は障壁に阻まれエヴァンジェリンには届かない。しかし矢の勢いは衰えずエヴァンジェリンの障壁を削り取っていく。

「くっ！？ 三重に張った障壁でも勢いすら殺せないとは…。」

エヴァンジェリンの顔にごく僅かだが焦りの表情が浮かんだ。

障壁に力を込めるが矢は無情にもエヴァンジェリンの魔法障壁を破っていく。

そして最後の障壁が砕け矢がエヴァンジェリンを捉えた…かに見えた。

「正直驚いたぞ。 この私の障壁を破り、さらには一撃与えるとは…。」

ニヤリと笑うエヴァンジェリンの左頬には一筋の傷が出来ておりそこから血が流れていた。

「フハハハハ！血を流すなど、久方振りの事だ。 エミヤシロウ！
やはり貴様は、私の見込んだとおりの奴のようだ！！」

エヴァンジェリンは心底楽しそうに笑い親指で頬の血を拭くと親指に付いた血をペロリと舐めとった。

すると、エヴァンジェリンの頬の傷は、傷など初めから無かったかのように瞬く間に消えて無くなった。

「貴様、吸血鬼か？」

エミヤの眼光が鋭くなる。その目に宿る感情は陰を帯びていた。

「何だ、今頃気付いたのか？ フン、案外鈍い奴だな貴様。 その様子ではまだ成り立ての様な。」

エミヤの言葉に呆れた様な口調で喋るエヴァンジェリン。

「見たところ、なってまだ十年も経っていないようだな。 しかしその歳でコレ程の腕前とは驚いた。 だが、全ては二流止まり。 差し詰め一流の二流と言ったところか？ クックック、全く持って残念な奴だな。」

エヴァンジェリンの酷い言われように、当のエミヤは何も言わなかった。

自分の才能の無さは、自分一番イヤと言うほど分かっている。

「その反応からすると、自分の才能の無さを理解しているようだ。今の強さを手に入れる為にしてきたことは、並大抵の事では無かったであろう。その愚直さに敬意を表し、今私が撃てる最大の呪文を貴様に見せてやろう。」

すると急にエヴァンジェリンから今までに無い高密度な魔力が感じ取れた。

そして先程までとは段違いの圧力がエミヤ^{プレッシャー}へのしかかった。

「君が最大の技で来るのなら、私は最高の楯をもって、君の技を正面から打ち破ろう。」

両者互いに腕を突きだし構えを取ったその時、二人の衝突を遮る声が響き渡った。

「双方そこまで！ コレ以上の争いはまったじや。」

二人が声のする方に視線を向けると、そこには頭骨が異様に伸びた老人が立っていた。

七話／遭遇（7）（前書き）

お待たせいたしました。

毎回の如く文字の羅列ではありますが楽しんでいただけたら嬉しいです。

七話／遭遇（7）

私は目を疑った。

私の目の前に現れた白髪の老人。

その老人の醸し出す雰囲気、歴戦の戦士のモノであり、異様な威圧感を放っている。

そして私を尚更驚かせたのはその老人の後頭部の異常な長さであった。

私の視線に気づいたのか、老人は有無を言わせぬ威圧感プレッシャーを放ってきた。

しかし何故だかその姿からは哀愁が漂っているように見えた。

「オイッ！！ジジィ！ 貴様何しに来た！！ 私とエミヤの勝負に水を差しておいて、よもや唯で済むと思っているのか？」

エヴァンジェリンは底冷えしそうな程の怒気を孕んだ言葉を老人へと向けて放った。

「ホッホッホ。済まんのエヴァンジェリン。じゃが此方も、地形が変わるほどの戦闘は見過ごす事は出来んなのだな。」

老人の言葉にエミヤは辺りを見回す。

二人の戦っていた周辺の木は薙ぎ倒され、地面には何ヶ所か穴が空いている。

流石にやり過ぎたと感じたのか、エヴァンジェリンの額から一筋の汗が流れ落ちた。

「…。」

「流石にコレ以上この森を壊されては適わんからの、じゃからワシが直々に出向いたワケじゃ。」

老人はそうエヴァンジェリンに言つとエヴァンジェリンの側に近寄った。

「チッ。興が削がれた。私は帰って寝る。」

そう言い残しその場を立ち去ろうとするエヴァンジェリン。

「コレ待ちなさいエヴァンジェリン。 お主も一緒に来てもらおうぞい。」

老人は帰ろうとしたエヴァンジェリンに向かいそう言った。

「なぜ私が一緒に行かねばならん。 エミヤの事ならそつちで勝手にやれ。 私は疲れたから帰る。」

エヴァンジェリンは心底面倒そうに言うとは再度立ち去ろうとする。しかしそのエヴァンジェリンに老人は更に声をかけた。

「コレコレ、待ちなさい。 お主にも色々と聞きたいことがある。 済まんが一度、出向いてもらえんかの？」

「チツ。今日は疲れた、帰る。 明日で構わんだろ。 行くぞ茶々丸！」

エヴァンジェリンは不満げながらも返答し、茶々丸を呼ぶと老人の返事も聞かずに飛び去っていった。

その後遅れて、静かに佇んでいた茶々丸がペコリと頭を下げて主人と同じ様に飛び去って行った。その際に茶々丸の背中部分が開閉し、バーニアが出現し火を噴いて飛んで行ったのを目撃したエミヤは、日本の科学技術も進歩したなあ感慨深げに思った。

「さて、待たせたの。ワシはこの麻帆良学園の学園長をしており、近衛近右衛門と言う者じゃ。」

近衛近右衛門と名乗った老人は私の方に振り返ると人好きしそうな顔で自己紹介を始めた。既に最初の時のような威圧感^{プレッシャー}は無く、目の前にいる人物は唯の年寄りにしか見えない。しかし、その佇まいからは一切の隙は窺えず逆に恐怖を感じる。如何にこの人物が幾多の経験をしてきたかが窺える。

「私の名前はエミヤシロウ。この様な有り様にしてしまい申し訳無い。何分命の危機だったので周りを気にする余裕が無かった。ご了承願いたい。」

「いやいや構わんよ。エヴァンジェリンには、ああは言ったものの戦闘自体は気にせんでいい。」

ホッホと笑いエミヤに應える近右衛門。

「さてエミヤくん。積もるあるじやろう。済まんが一度ワシの部

屋にまで来て来れんかの？　そこで色々君の事を聞かせて貰いたい。」

近右衛門の提案を聞き一瞬考えるエミヤ。その時フと自分の周りから数人の気配がする事に気づいた。

「ついて行かなければ実力行使、と言うわけですか？　其方の木の陰に隠れている方々によって。」

私の言葉にピクリと何人かの気配がブレるのを感じた。

「否定はせん。そう取って貰って構わんよ。　何分君は侵入者なのじゃからな。」

さっきまでとは打って変わり、剣呑な雰囲気を出す近右衛門。その有無を言わせぬ雰囲気空間が張り詰めるのを肌で感じる。

「（ここでコレ以上争っていても何も進まんか。　ここがどんな場所なのか、彼らがどんな人物なのか見極める必要もあるな。）」

自分の中での考えが固まったエミヤは近右衛門達について行く方が懸命と判断しその提案を受けたのだった。

こうして、エミヤシロウのこの地での最初の夜が更けたのであった。

「オマケ」

「さて、行く前にこの森を元に戻さねばなんの。」

近右衛門はおもむろに手を翳すと、スツと横に引き呪文を唱えた。

「Reparo」

すると瞬く間に薙ぎ倒されていた木や、地面にあいた大穴が映像の巻き戻しの様に元に有った位置に戻っていく。

「凄い。」

素直に賞賛を贈るエミヤ。目の前で行われている現象は、まさに魔法だった。

「ホッホッホ。昔の古い友人にちと教わったものじゃよ。名をアルバスと言うてな、偉大な方じゃよ。」

近右衛門は森の修復が済んだのを確認するとエミヤに自分の腕を取るように言った。

「コレもアルバスに教えて貰ったモノなんじゃが、初めての者はちと酔うかも知れんがまあ大丈夫じゃろ。」

腕を取ったエミヤは何かを言おうとしたその瞬間、近右衛門とエミヤは忽然とその場から姿を消したのだった。

八話ノ遭遇（8）（前書き）

内容を気にしないでください。

書いてて自分で分からなくなりました。

八話／遭遇（８）

「ウグツ予想以上の揺れに気分が…。」

吸い込まれるような慣れない感覚に吐き気を催したエミヤ。

「ほっほっほ。やはり、ちとばかり無謀だったかの？」

エミヤの様子に学園長が心配そうに口を開いた。しかしその顔にはイタズラが成功した子供のような表情が宿っている。

「（この爺、分かっていてわざとやりやがったな…。）いえもう治まりました。お気遣いありがとうございます。」

思ったことをおくびも表情に出さず学園長に感謝の意を述べると、スクツと立ち上がり学園長に顔を向けた。

「そうかそうか。まあ無理はせんようにの。」

自分でやっというしれつと言う学園長。エミヤの頬がヒクリと動くが、幸い学園長には気づかれなかったようだ。

エミヤは辺りを見回し状況を確認する。どこかの執務室だろうか立派な机が居を構えている。

「ここは学園長室じゃよ。何変な仕掛けなどはありませんから安心なさい。」

無意識に学園長室を警戒して眺めていたのか学園長に言われエミヤは態度をなおした。

「さて、ここに連れてきたのは他でもない。君の事について聞く為じゃ。」

エミヤは学園長の言葉に無言で身構える。

「単刀直入に聞こう。君は何者じゃ？」

又しても学園長から、森で感じた重圧感フレッシャーが発せられる。

発せられた重圧感からは一切の虚偽を許さないと発しているかのようにも感じる。

「私は…。」

言葉に詰まるエミヤ。自分の名前はおるか自分の故郷の事や出生まで思い出せない。

侵入者の自分が自分の事を分らないと言っても信じてもらえない。

「何か言えない分けても？」

学園長の視線が鋭くなる。

エミヤは意を決し口を開く事にした。

「私は、自分の事が分からない…。自分の本当の名前や生まれた場所も。なぜこの場にいるのかも…。」

静かに喋るエミヤの声に学園長は何も言わずゆっくり耳を傾けた。

「つまり君は記憶喪失と言う訳じゃな…。しかし、名前が分からないとは？ エミヤと言う名前は？」

学園長は静かに口を開きエミヤに話しかけた。

「不意に頭に浮かんだん名前を使っただ。誰の名前は分からない。い。」

エミヤの言葉に真実であると捉え学園長はエミヤに今後のことを話した。

「エミヤくん。君はこの学園に侵入し戦闘行為を行った危険人物。本来なら本国へ送り然るべき処置をして貰うわけじゃが…。」

チラリとエミヤを見る学園長。

エミヤは当然だと思った。そのような人物は拘束などし然るべき処置をする。学園を預かる者として当然の結論だと思った。

「がしかし、記憶を失った女の子を放っておくなど人として出来ん。」

「えっ？」

学園長の言葉に耳を疑うエミヤ。

「どっじゃエミヤくん。この学校に通ってみんなかね？」

九話／邂逅（1）（前書き）

一応今回から原作に突入します。

基本的には原作の流れになりますのでコレはと思うかもしれませんが楽しんでいただけたら嬉しいです！

九話／邂逅（１）

朝の賑やかな喧騒の中、麻帆良学園へと続く大通りを駆け抜けていく二人の少女。一人は自分の足で、もう片方はローラーブレードで走っている。

急いでいるのか物凄い速さで駆けていた。

「もう！何で起こしてくれなかったのよこのか！」

髪をツインテールに結んだ活発そうな少女が隣をローラーブレードで走るもう一人の少女に叫んだ。

「何度も起こしたえ それでもアスナ起きなかったやん」

「うっ」

このかと呼ばれたもう片方の黒髪の少女に事実を言われ、アスナと呼ばれた少女は、ばつが悪そうな顔をする。

「そんな事より何で学園長の孫娘のアンタが新任の教師のお出迎えまでしなきゃなんないのよ！」

アスナは遅刻の理由の追及をされないように、無理やり話題を変え話を逸らした。

「スマンスマン ウチもじいちゃんの頼みごとやから断れへんし、断るとまたお見合い話し持ってこられるんやもん」

このかは眉を下げて少し困った風に話した。

「アンタも大変ね 毎回毎回お見合いお見合いって… 一度ガツンと言ってやれば良いんじゃない？」

「うゝん毎回ガツンとやっとなるんやけどダメなんよ」

「なら今度はもっと強くやればいいんじゃない？」

「そやね 次からはもっとガツンと言ってみるわ」

そう言ったこのかの左手にはいつの間にか金槌が握られていた。

「ガツンとの意味が違っただけど…」

冷や汗をかきながらアスナはこのかに言った。

「しかし学園長こうえんの友人で言ってたわよね？ だったらそいつもじじいじゃないの？」

「そうけ？ でも今日のアスナの運勢には運命の出会いありって占いに書いてあるえ」

「えっマジ！？」

「ほらコ」

このかは小さな手帳の様なものを開いてアスナに見せた。

「しかも、好きな人の名前を10回言って『ワン』と鳴くと効果あ

りやて」

「うそっ!？」

驚くアスナ。

「高畑先生、高畑先生、高畑先生、高畑先生（以下略）
ワンッ!」

道の真ん中で突然名前を連呼しながらワンツと鳴いたアスナを見た
周りの通行人達は皆ビクツと驚き引いていた。

「……」

アスナに言った張本人のこのかも大きめの汗を一筋流しながら同じ
く引いていた。

「あははは アスナ高畑先生のためなら何でもするわ」

ホントにやるかと言いながら実は冗談であったとアスナにバラす
このか。

「殺すわよ」

ゴゴゴと聞こえてきそうな危険なオーラを出してこのかを睨むアス
ナ。

「スマンスマン お詫びにもう一つおしえるわ えーと 次は逆立
ちで開脚の上全力疾走50mして『ニヤー』と鳴く……」

「やらねえ!!」

言った手前からデタラメを言うこのかにくあつと口を開けツッコミを入れるアスナ。

流石に二回目は引つかからなかったようだ。

「にしてもアスナ足早いよね・私コレやのに」

シャカーとローラーブレードを走らせるこのか。

「悪かったわね体力バカで」

拗ねた口調で眉を顰めるアスナ。

しかし本当に不機嫌という訳ではなくどこか冗談めいた様な顔をしている。コレが二人の間での挨拶の様なものであるう。

二人その様な会話をしていたその時アスナの横をふわっと風が抜けるのと共に誰かが近寄るのを感じた。

「ん？」

ふとそちらに視線を向けてみると隣には、背中に大きな荷物と布で巻かれた暴の様なものを背負った見知らぬ赤毛の少年が自分と一緒に走っていた。

何で子供がと思うアスナ。しかし次の瞬間子供の言った一言がそんなアスナの考えを一瞬で消し去った。

「あのー…… あなた失恋の相が出てますよ」

「え」

凍り付くアスナ。

「な し しつ って」

あまりのことに言葉がでないアスナ。

「ですから失恋の相ですよ」

更にもう一回言う少年。流石に二回目にはアスナの怒りが爆発した。

「何だこのガキヤ」

「うわああ!?!」

アスナの剣幕にビビる少年。

「い、いえ 何か占いの話が出ていたようだったので」

「どどどどついうことよ このかみたいにテキトーなこと言つと承知しないわよ」

滝のような涙を流しながら少年に詰め寄るアスナ。

「い、いえ かなりドギツイ失恋の相が」

「ちょっとおお〜っ」

更に涙が流れるアスナ。

「なあなあ子供やるー？ この子初等部の子と違うん？」

「あたしはねガキが大ツツキライなのよ！！」

手をワナワナと震わせポロポロと大粒の涙を零すアスナ。隣ではこのかがかーいーと少年を眺めている。

「取・り・消・しなさいよ〜」

「あいや あわわ」

少年の頭を掴み持ち上げるアスナ。少年はあわわと手をバタつかせて目を回して狼狽えている。

「坊や こんな所に何しに来たん？」

そんな光景を見ながらこのかは少年にこの場にいる理由を尋ねた。

「ここは麻帆良学園都市 その中でも一番奥のエリア」

「初等部は前の駅だよ」

少年を持ち上げたまま説明をするアスナ。更に力が入ったのか手足を更にバタつかせる少年。

「そう！ つまり子供は入ってきちゃいけないの わかった？」

「は、放してください〜っ」

アスナは涙目で睨みながら少年に言い聞かせる。

「（あうっ な、なんて乱暴な女の人なんだー 日本の女の方は親切で優しいって聞いたのにーっ）」

少年は目の前の女の方が聞かされていた日本の女性の特徴と全く違っていた為戸惑っていた。

「ほな ウチら用事あるからひとりでかえってな！」

「じゃあねボクー！」

「いや あのボクは」

少年を地面に降ろしながらアスナとこのかは先へ急ごうとした。少年は何かを言い掛けるがグイグイと手を押し付けられ最後まで言えなかった。

「イヤ それでいいんだ明日菜」

そんなやり取りをしていた三人に向かって誰かが声をかけた。

「おはよう明日菜」

「えっ」

「あ」

声をかけられ慌てて手を離すアスナ。

振り向いた視線の先にはマフラーを深めに巻き赤いフード付きのコートで顔などを隠すようにして立っている自分と同じ制服を着ている少女がいた。

「し、シロ!？」

「あ、おはようシロー」

「おはよう木乃香 明日菜は挨拶してくれないのか？」

「う、悪かったわよ おはようシロ」

寂しそうな表情をするシロと呼ばれた少女言われ明日菜は慌てて挨拶を返した。

明日菜の挨拶を聞いたシロはイタズラっぽい笑みを浮かべていた。

「ふふ良いよ 改めておはよう二人とも」

「シロ、いいってどうゆうことよ？ それに何であんたがここにいの？」

「そのまんまの意味だよ 彼はこの中等部に用があるんだ 私がここに理由は君達と同じさ」

「それってどうゆう・・・」

「いや - 良いんだよアスナ君」

明日菜がシロの言った言葉の意味を聞こうとしたとき明日菜達の遙か頭上から声かけられた。

「お久しぶりでーす！！　ネギ君！」

「えっ！？」

「あ」

「た、高畑先生！？」

明日菜達に声をかけたのは眼鏡をかけた白髪の男性この学園の教員である高畑・T・タカミチであった。

「おはよーございまーす」

「お、おはようございま　！？」

「久しぶりタカミチーッ」

挨拶をする三人。

「！？　　っ　　し、知り合いなの　　！？」

少年がタカミチと知り合いと言う事にズザザッと驚き飛び退く明日菜。

「麻帆良学園へようこそ　いい所でしょう？　『ネギ先生』」

「え　せ、先生？」

「　」

タカミチの先生と言う言葉に驚く木乃香と明日菜。

「あ　ハイそうです」

ネギと呼ばれた少年はコホンと一回咳をすると改めて二人に向き直りペコツと頭を下げ礼儀正しく挨拶をした。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました　ネギ・スプリングフィールドです　」

「え　ええーっ」

「へえーすごいなあー」

ネギの発言に驚く二人。明日菜などは顔を引きつらせている。

「ちょ、ちょっと待ってよ　先生ってどーいうことよ!？」

「え、あの!？」

「あんなみたいなガキンチョがー」

「まーまーアスナ」

明日菜は納得がいなくネギへと掴みかかった。

「いや 彼は頭がいいんだ安心したまえ」

「先生 そんなこと言われても」

ハハハと笑いながらいつの間にかタカミチが下に降りてきていた。掴んでいた手を離し明日菜は困った表情でタカミチをみた。

「あと今日から僕に代わって君達A組の担任になってくれるそうだよ」

タカミチの言葉にがーんとショックを受ける明日菜。木乃香も、えーと驚いている。

「そ、そんなあ アタシこんな子イヤです さっきだってイキナリ失恋 いや、失礼な・」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言っなー!!」

ネギの正直な発言に明日菜が吠える。

「大体あたしはガキがキライなのよ! あんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで」

明日菜は涙を流しながらネギに掴みかかる。

「ストップだ明日菜 君があの子に何を言われたかは知らないが、仮にも年上の女性が子供に手を出すのはいただけないな」

掴みかかる明日菜を止めたのは先程から喋らず佇んでいたシロだった。

「うつ わかったわよ・ って仮にもってどういう意味よ、仮にもって!？」

「そのままの意味さ 彼は教員になれるほどの頭の良さみたいだが君はどうか？ 前回のテストの点数は」

「キヤー それ以上いわないでー！」

「そうだな コレ以上は可愛そうだから言わないでおこう」

イタズラっぽい表情を浮かべ茶化すように言うシロ。いつの間にか明日菜の怒りもおさまったようだ。

「さて少年 彼女を怒らせた原因は君にある様だが、一体彼女に何を言ったのかね？」

シロは静かな口調で件の中心であろうネギへと話しかけた。

「えっと、僕はあのお二人が占いの話しをしていたのが聞こえてそれで、そちらの女の人の占いの結果を言ったんです」

「ほお 占いの結果は何と伝えたのかな？」

「失恋の相が出ています それもドギツいやつがって言いましたボクは親切で教えただけなのに・」

つまりはネギのいない親切心が招いた出来事であった。

「なる程　誰だつて聞いてもない占いの結果を言われれば嫌だし、ましてや女の子にアナタは失恋の相が出ていますなど言えば、アナタの恋は実りませんと言っている様なものだ　君だつて全く知らない人から自分の事を否定されれば嫌だろ？」

ネギはシロの言葉にハツとした。

自分は見ず知らずの人に親切だからと言って相手の気持ちも考えず何てことを言つてしまったのだらう。

「あの　ボクは　」

後悔の念を表情に浮かべ落ち込むネギ。

「君はまだ幼い　相手の気持ちを考えると分らないかもしれないが君が親切だと思つて行ったことが逆に相手を傷つける事がある場合もある　ソレだけは忘れないでいて欲しい」

そう言つてシロはネギの頭を優しく撫でた。

「ごめんなさい」

「謝る相手は私ではなく彼女だろ」

「あハイ　あのボクの軽率な言葉でアナタに不愉快な思いをさせてしまいました　あのゴメンナサイ！」

ネギは明日菜の方を振り向くと勢いよく頭を下げ謝った。

「べ、別に良いわようもう気にしてないし　それに私もちょっと大人気なかったし」

顔を赤らめ頬を掻きながら斜め上を向いてネギへと謝った明日菜。

木乃香もその光景を嬉しそうに見ていた。

それを見ていたタカミチは四人に向かって口を開いた。

「さて仲直りも出来たところでそろそろ学園長のところへ行こうか」

タカミチの言葉に本来の目的を思い出す明日菜達。

「それじゃあ行くよ」

明日菜達はタカミチに促され本来の目的である学園長室へと歩みを進めるのであった。

九話／邂逅（1）（後書き）

ドッジボールや図書館島の話しとかがっていると思いますか？

十話ノ邂逅（2）（前書き）

考えるな感じる。

白のセリフには違和感感じると思いますが何となく雰囲気を楽しんでください！

十話／邂逅（２）

学園長との挨拶を終えたネギは指導教員のしずなと言う女性に導かれとある教室の前へと来ていた。

「（これが　　僕がこれから教えることになる人達かー　　）」

教室の扉のガラス部分から覗いたネギは初めて見る見知らぬ年上の女性に少し圧倒されていた。

「そつだクラス名簿！」

ちよつと焦りながらクラス名簿を開くネギ。しずなはその様子をくすりと笑いながら眺めていた。

「げ　　い、いっぱい　　」

クラス名簿をみたいネギはその人の多さに若干気圧されていた。

「早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね」

「あつ　　」

しずなの言葉にどもるネギ。

「（うつ　　こんなにたくさんの年上の女の人達に教えるのか
？　何だかドキドキしてきたぞ　　）」

教室の中から聞こえてくる騒がしい声にネギの緊張感が高まってき

た。

「（本当にボク こんな異国の地で先生なんてできるんだろうか
お姉ちゃん、アーニヤ ボク大丈夫かな ）」

落ち込むネギであつたが、故郷を別れるときに見送りに来てくれた
従姉と幼なじみの姿を思い出していた。

『かんばつてねネギ』

『しつかりやるのよー』

ネギはもう一度クラス名簿を見る。

「（あつこの人は ）」

ネギが見つめる先には今朝自分を優しく諭してくれた少女の写真が
あつた。

「衛宮、白 」ぐっ

無意識に写真の少女の名前を口に出すと、ネギは先程まで下を向い
ていた顔をぐっと上げ意を決して教室の中に入ろうと扉に手をかけ
た。

コンコンとノックの音かが鳴り扉が開かれる。

ノックの音にさっきまで騒がしかった教室内は一気に静かになる。

「あ」

子乃香は誰が来たかは察しがついたようで声が出た。

「（来たな）」

明日菜は頬杖をつきながらジッと扉の方を見ている。

ガラツと扉が開きカチンコチンに固まったネギが顔を出した。

「失礼しま
」

す、と言いかけたその時、扉に仕掛けられていた黒板消しがネギの頭めがけて落下してきた。

誰もが真っ白になるネギを想像しクスクスと笑っている。

そして教室の全員が期待した通りになると思われた瞬間――

「ん？」

――ネギに当たるはずだった黒板消しはネギの頭の天辺でぴたりと止まり、その場所でふわりと浮いていた。

「！？」

ざわざわとしだす教室内。その光景を見ていた明日菜も驚いていた。

「（あ やば コレは有名な黒板消しトラップ！ 日本にもあるんだ）」

ネギはとつさに考えボフツと大量のチョークの粉を頭から被ったネギ。

一瞬の出来事だったため教室内の生徒たちには特に不審に思われることはなかった。

「ゲホゲホ いやー あはは なるほど ゲホッ ひっかかっちゃったなあ ゴホ」

「あらあら」

大量の粉にむせながらネギは努めて普通に喋りながら中に入ろうとする。その光景にしずなも驚いていた。

ネギはゴホゴホとむせながら教室内に入ろうとするが一步踏み出した瞬間足元に張られたロープにガツと足を引っかけた。

「へぶっ!？」

コケたネギは顔面から床に倒れ。

「あぼ」

倒れたネギの後頭部にバケツが落ちてきてそのままガボンツと頭に被さった。

「ああああああ」

そのまま前転しネギのお尻にパスツパスツと吸盤の付いた矢が当たり更にガガガと転がる。

「ぎゃふんっ」

教卓に背中からぶつかりようやく止まった。

その光景を見ていた生徒たちの笑い声で教室内が包まれ、しずなは困ったように笑っていた。

どうやら先程の黒板消しの存在は、今の出来事で完全に皆の頭の中から消えたようだった。

「（今は　？）」

そんな中明日菜だけは信じられない物を見たような顔をしていた。

「な　な　」

「えっ　」

「あ　あれ　？」

涙を流しながら座り込んでいるネギを見て先程まで笑っていた生徒たちはネギの姿をみて一様にネギの下へ駆けつけた。

「えーっ子供！？」

「君大丈夫！？」

「ごめんなさい　てつきり新任の先生かと思って」

皆慌てたように口々にネギに謝り始めた。

「いいえ その子があなた達の新しい先生よ さ、自己紹介してもらおうかしら」

しずなは、ざわめく生徒たちをパンパンと手を叩き静まらせた。

「ネギ君」

「は、はい」

ネギはしずなに促され教卓へと向かう。
ゴクツと喉を鳴らし教卓へ立つネギ。

「ええと あ あの」

緊張のあまり言葉が直ぐに出てこない。

「ボク ボク」

ネギの挨拶を静かに聞き入る生徒達。意を決して口を開いた。

「今日からこの学校でまほ 英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです 3学期の間だけですけどもよろしくお願いします」

ネギのハッキリとした口調での挨拶が終わり少しの間沈黙が走る。

『キャアアッ！ か、かわいいい〜』

突然の大歓声にビクつくネギ。

「何歳なの～～!!?」

「えうつ!?! その10歳で」

「どっから来たの!?! 何人!?!」

「ウエ、ウエールズの山奥の」

「ウエールズってどこ?」

「今どこに住んでるの!?!」

「いや まだどこにも」

ワラワラと群がりネギを取り囲む女子生徒達。その勢いに圧倒されながらも質問に応えていく。

「マジ何ですか?」

「ええ まじなんですよ」

眼鏡をかけた生徒がしずなに問いかける。

「ホントにこの子が今日から担任なんですかー!?!」

「こんなにカワイイ子もらっちゃっていいの～～!!?」

「コラコラあげたんじゃないのよ 食べちゃダメ」

「ホントに先生なんだー!?」

揉みくちやにされわたわたするネギ。好き勝手なことを言っている生徒達をやりわりたしなめるしずな。

「ねえ 君つてば頭いいの!？」

「い 一応大学卒業程度の語学力は」

「スゴイ!!」

「いやああん」

「あーん カワイー」

しかし尚も抱きつかれたりと過激なスキンシップを取られネギの顔は羞恥で真っ赤になっていた。

「（よ、よかった なんとか歓迎されているみたい ちよつと危なかったけど）」

生徒達に受け入れられたことと、自分の秘密がバレなかったことに安堵するネギ。

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持っているけど見てのとおりあなた達より年下よ お手やわからかにね」

しずなは生徒達のネギに対するスキンシップが強いため注意をした。

「ハイ」

生徒達は聞いているのかいないのか、返事だけは良く返した。

その時ネギに近づいたひとりの生徒がいた。

「ねえ あんた、さっき黒板消しに何かしなかった？」

近づいてきた生徒―明日菜は先程の黒板消しのトラップの時に感じた違和感についてネギに聞いたのだした。

「何かおかしくない？ あんた」

「え」

ギクリと動揺し冷や汗を流すネギ。

先程の安堵があつた分ネギの動揺は大きく瞬く間に顔色が悪くなる。

「キツチリ説明しなさいよ」

「え あの」

静かな口調で喋る明日菜にネギは動揺しうまく言葉がでない。

その光景を見かねた一人の生徒がバンバンと机を叩き明日菜に注意をした。

「お止めなさいアスナさん 先生が困っているでしょう もっとも、あなたみたいな凶暴なおサルさんは人の言うことを素直に聞けるほど知能が良くはなさそうです」

明日菜を止めたのは出席番号29番のこのクラスの委員長をつとめる雪広あやかであった。

「なんですって？」

ギロンツと視線だけで殺せそうな目つきであやかを睨みつけた。

「ネギ先生はオックスフォードをお出になった天才とお聞きしておりますわ 教えるのに年齢は関係ございません どうぞ、HRをお続けになってください」

「は どうも」

突然のあやかの申し出に呆気にとられるネギは口をポカンと開けて返事をした。

「私はコイツに聞きたいことがあるだけよ 委員長こそ何いい子ぶってんのよアンタ！」

「あら いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然ですよ」

明日菜の言葉にふっと笑い髪をかきあげる動作をしながらさも当然とばかりに少し小馬鹿にした様子でかえした。

「何がいい子よ！ このシヨタコン」

あやかの態度にカチンときたのか、アスナはあやかに対してあからさまな言い方で貶めた。

「なっ」

余程その言葉が琴線に振れたのかびくんと震えると、次第にわなわなと震えだした。

「言いがかりはおやめなさい！ あんたなんかオヤジ趣味のくせにいい！」

「なっ！」

「知ってるのよ！ あなた、高畑先生のこと」

「うぎゃー その先を言うんじゃないー この女ーッ」

売り言葉に買い言葉でお互いに言い争いをし最後には掴み合いの喧嘩を始めたアスナとあやか。

それを楽しげに遠巻きで見始めるA組の女子生徒達。中にはやれやれと煽る生徒もいた。

「（あわわケンカだ 大変だ ここは先生として ）」

ネギは目の前で繰り広げられる取っ組み合いの喧嘩に引きながらも自分が止めなくては考えた。

「あの やめ 」

しかしあまりの光景に声が良く出ず、ネギの声は届かず一向に騒ぎは収まらない。

その光景をみていたしずなが助け船を出そうと考えたその瞬間、一人の生徒の声でこの騒ぎは終局を迎える事となった。

「静まれ」

たった一言。

その一言で先程まで騒いでいた生徒達は勿論騒ぎの発端であるアスナとあやかもぴたりとその動きを止めていた。

「まったく 女性が掴み合いのケンカなどみっともない」

騒ぎを鎮めたのは、明日菜達と同じく今朝ネギを迎えに来ていた衛宮白であつた。

誰一人言葉を発しない。白の雰囲気がそうさせないのである。

赤いフードを目深に被り、腕を組んだまま視線だけで周りを見渡す白。

「アスナ いくらバカにされたからと言って同じ様に言い返していればただの子供でしかないな」

「うっ」

「あやか 先に仕掛けた君が言い返されたからといって手を出すのはどうかと思うのだが」

「うっ」

白の言葉にうつと詰まり2人はぐうの音も出ない感じであった。

「皆もそうだぞ 毎度毎度お祭り騒ぎが好きなのは分かるが友達のケン力を止めもせず逆に助長するのは見過ごせないな」

白の静かだが重みのある言葉に教室で騒いでいたすべての生徒達が押し黙った。

皆一様に反省の色を示したのを確認すると先程までとは違う咎めるような口調ではなく優しい口調で静かに口を開いた。

「分かってくれたかな？ さあアスナはあやかに、あやかはアスナに、みんなは二人に謝ろうか それで終わりにしよう」

白の言葉にアスナ達は頷き口を開いた。

「委員長ごめん 悪かったわ」

「私こそ言い過ぎましたわ ごめんなさいアスナさん」

「」「ごめんなさい」「」

皆自分の非を詫び素直に謝ると白はその様子を眺め静かに微笑んだ。

「はいはい みんな時間もおしてるし授業しますよ！ ネギ先生お願いします」

「は、はい」

先程から成り行きを静かに見守っていたしずながパンパンと手を叩きながら口を開き生徒達を促した。

ガヤガヤと自分の席に戻っていく生徒。そんな中しずなに近づく一人の生徒。

「源先生　でしゃばった真似をしてスイマセン」

近づいたのは白であった。

白はソツとしずなに近づくと自分のでしゃばった行為を詫びた。

「いいのよ　私なんかよりもよっぽど上手く取り纏めていたわ」

「さあそろそろ授業だから　衛宮さんも席について」

「はい　ありがとうございます」

しずなの言葉に頷いた白は頭を下げると自分の席へと向かった。

その様子をみだしずなは薄く笑うと自分もネギの補佐をするべく窓際へと移動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761k/>

剣製の吸血姫～ネギま！訪問録～

2011年11月16日13時44分発行